

『川上ダム無用の決定的論拠』

’05.4.15

自然愛・環境問題研究所
総括研究員 浅野 隆彦

A) 治水の場合

1. 川上ダム予定地は、洪水防御を必要とする上野北西部まで 19km 離れている為、もしダム上流集水域に大出水があったとして、ダムなしでも、河道貯留効果などにより、ハイドログラフの波形は平坦化する = 即ち、洪水波の時間当り流量が大きく減衰してしまうのである。

この事は、上野北西部の洪水防御の観点からすると「役立たず」と言う事。もともと川上ダムは上野北西部洪水防御の為に選定されたのではなく、高度経済成長期に入り膨張する「都市用水」が本命なのであった。

2. 狭窄部として堰上げる為、上野北西部に氾濫を起してきたとされる岩倉峡までの流域面積に対し、川上ダム集水面積は 11% に過ぎない為、治水的役割は殆んど無い。
3. 岩倉峡の真の疎通量については議論のあるところだが、最低でも、河川管理者（木津川上流工事々務所）自身が、昭和 48 年から平成 5 年までの観測流量表を基礎に不等流計算をし、 $3,630.61 \text{ m}^3/\text{s}$ (計画高水位) を導いており、その後河道改修などで流下断面が拡大しているので、実際は、 $4,000 \text{ m}^3/\text{s}$ (計画高水位) 位ではないかと思えるが、この最低の $3,630 \text{ m}^3/\text{s}$ を仮に岩倉峡疎通量とすると、上野遊水地のピークカット特化とその湛水量 900 万 m^3 の働きを足し、(5313 洪水) の出水量 1.8 倍でも氾濫にならない。
4. 「淀川水系工事实施計画」(昭和 46 年改訂) 通りに島ヶ原地点計画高水量 $4,500 \text{ m}^3/\text{s}$ になるよう、少しだけ岩倉峡を開削すれば済むことである。昭和 40 年から『下流堤防の破堤危険性を増大させるから、狭窄部の開削は当面できない』と言い続けているが、その欺瞞はもう通用しない。もうその言い訳は 40 年の歳月が過ぎた。今、20~30 年の期間に対する「河川整備計画」を策定しようとしているのであるから、『今より 20 年間で、下流の脆弱な堤防部分等の補強整備を完成させ、岩倉峡を少し開削し、島ヶ原地点 $4,500 \text{ m}^3/\text{s}$ 計画高水量を実現させる』。これで万事メダタシメダタシとなるのである。
昭和 40 年バーチャル引伸し大洪水も何のその、きっと、1/1500 治水安全度達成と相なりそうなのである。

[利水の場合、環境の場合は後日発表とする。]